

Y 2008 No.44



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

新刊紹介

○風天～渥美 清のうた

森 英介〈大空出版〉



蓋あけたような天で九月かな
赤とんぼじっとしたまま明日は
どうする

「男はつらいよ・フーテンの寅さん」
即、渥美清の俳人ぶり、俳句を通じた
追想録である。フーテン、風天と号し
た渥美という俳優の一代記としても読
める。開巻6ページほどプロローグと
して、ありし日をしのぶ写真が集めら
れているが、私がかつとも興味深く関
心を寄せたのは、清の母校東京都板橋

区立第一小学校に「寅さんふれあいル
ーム」が設置されている一葉であった。
小学校にこのようなコーナーがあると
は――。

一読、風天さんの句には心の原風景
ともいえる旅情のこもる哀歎がそこは
かとなく流露している。

お遍路が一行に行く虹の中



著者の永田喜久男先生は北九州在住。
小学校教師として勤務。在任中30年に
わたり、児童詩教育にとりくまれ、校
長を最後に退職後も児童詩の創作活動
に精励されたその成果がこの詩集に結
実。題名の「はんぶんごっこ」という
のは、キャベツを半分虫が喰い残りを
自分たちが食べるようになったことを、
「はんぶん」と感じとられ「ごっこ」
とつけくわえられたところにメルヘン
が生きた。

暑中見舞が
まだひそんでいたんだ

残暑見舞を
ポストの口が
ふっと熱い息をはいた

ひそんでいたんだ

ジュニアポエム双書
はんぶんごっこ

永田喜久男
(銀の鈴社刊)

受贈図書紹介 ③

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。
あしからずご了承下さい。

教えきし道……………高根 敏臣
あなたはわが子にリベンジされる……………郡司 力
息子が中学生……………塚崎 雄一
筑後水滸伝 田尻鑑種……………佐野 量幸

こだまの響き……………浦田 茂
歌集農婦の眩き……………毛利キヨ子
句集八女津媛……………西江 和子 八女市
白仁秋津の世界……………顕彰する会 大牟田市
餓鬼の残像……………八女川 瀬 東京都
偲び草……………井上 公 東京都



○川流句集 鶏肋
大鶴 嘉晴

三伏の酷暑過ぎてても秋はまだ
運勢があまり良すぎてセイロ丸
賀状書く数減りつづくもの淋し
挨拶もできなくせして子ができた
年ごとに皺と一緒に夢しぼむ

後半は夫人大鶴恵美子さんの随筆集『漫歩の足跡』68篇。平成五年より「手紙の書き方教室」でご勉強。その後、毎日新聞の「はがき随筆」「筑後市公報〈散歩道〉」に掲載のものを収録。人生の哀歓を懸命に受けとめ歩いてきた姿を、感じとっていたゞけたら有難い……とまえがきに。



○復権か従属か
人類の共生をめざして
秋吉久紀夫(石風社刊)

著者は九州大学名誉教授・詩人・1930 北九州の生まれ。この表題の発想は、2001 年の同時多発テロ事件以来のつぎつぎと地球規模での事件や戦争発生に日本人として考えさせるものによるとあとがきに述べられている。なかでも注目させられるのは「わたしたちの知らない情報操作」の論述であった。

秋吉先生は中国文学者であるせいか、重慶にむけてかつての日本空軍が数十万発の爆弾を落とした無差別爆撃の跡がいたるところでむき出しに口を開いたまゝであったことから加害者としての反省から、八幡での空襲体験を思いおこして語られている。



○歌集 花も花なる
貞川みどり
(短歌研究社刊)

風吹けば風に押されて詣りたる最御崎寺の虚空蔵菩薩
はつみきまじ
梨の花いま盛りなり父逝きて七年過ぎる花の下に立つ
年経ても信仰の山さすがにて「英彦山ガラガラ」からからと鳴る
靄深き懐良親王の奥津城は古き落葉の積み重なりて
合瀬、耳納の峠越えれば星のふるさと茶の里なりし



○心のガーデニング
読書の愉しみ

福岡市井尻にお住まいの六百田麗子さんが主宰されての読書紹介冊誌。この号でNo.99。毎号自分史図書館に恵贈してくださっている。

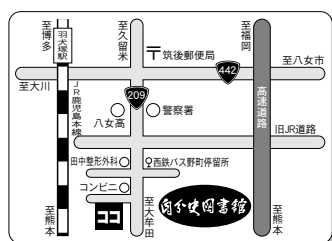
巻頭に六百田さんは「小さな森さん、こんにちわ」と題してつぎのような文を綴られている。「森の中のほんの四、五秒歩く間、見上げる空は桜と楓の幾重にも重なりあった青葉でふたをされ、まるで絵本の世界にまぎれこんだよう。木漏れ日が光のシャワーとなって歩いているひとの体にふり注ぎ、心の濁りも洗ってくれる」

編集掌記

▼前の43号に、直木賞作家古川薫さんの著作『斜陽に立つ』を、新刊紹介欄に書いたところ、ていねいな礼状をいただいた。「拙著をお読みいただき、また紹介の労を、ありがたく存じます。。」とあり、筑後八女に自分史図書館が存在することを知られ、今後のご健闘を：と記されていた。当方もありがたく嬉しいことであった。▼北海道の札幌の出版社柏艸舎（はくろしや）から、いちど本を買った縁で、ときおり近刊案内のパンフレットがとどく。大手の新聞書評欄等ではとりあげられない本が刊行されている。8月におくられてきたそれに、医師であり、写真家という梅領レイ著『知床開拓スピリット』に興味を抱いた。著者は出版の動機について、「忘れられた山中にわずかな、人の気配を探し出

自分史図書館

入館無料
開館 午前9時～午後5時
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

し、遺されたものから、それを作った“人”の思いや慣習や世界観までを引きずり出そう……という考えから、知床開拓の根源をさぐるべく知床の森を取材したと語られている。私の胸を打ったのは著者の「人の生きざまをないがしろにすることは許せない。」という一行である。自分史図書館に寄せられる一冊一冊に、それが当てはまる。(自分史図書館長 椎窓益)